

徳島県内でのコウノトリ・ツル類の飛来・生息状況

指標種・シンボルとしてのコウノトリ・ツル類

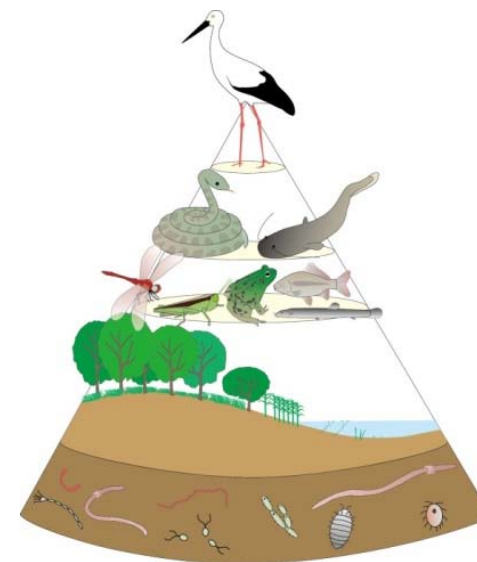
徳島県流域において、以下の2つのシンボル性により、徳島県全体の広域的な指標種として、コウノトリ・ツル類を共通の指標・シンボルに設定しています。

①多様で豊かな生きものと自然環境のシンボル

コウノトリ・ツル類は、里地里山や河川の生態ピラミッドの頂点に立つ、高次消費者です。コウノトリやツル類が、その地域に生息することは、食物となる多くの生きものが育まれる豊かな自然環境がある証であり、生態系サービスの質が高いことを意味します。

②自然と共生する社会のシンボル

コウノトリ・ツル類は大型の鳥類で、美しくよく目立つことから、取組の効果を実感しやすい生きものです。また、地域の人々の関心や支持を集めやすく、行動を引き出すことにつながります。コウノトリ・ツル類がくらししているという物語を付加価値とする生産物の販売や観光の推進、地域の交流人口の増加といった社会や経済の活性化への効果も期待できます。



日本国内のコウノトリの生息の現況



日本の野生コウノトリは1971年に絶滅したが、人工飼育繁殖が行われ、2005年に兵庫県豊岡市で放鳥が開始された。野外コウノトリは順調に増加して、2022年7月末に300羽を超えている。

2022年に徳島県鳴門市を含む全国8府県34巣で野外コウノトリが繁殖し、80個体の幼鳥が巣立った。

日本国内のツル類（ナベヅル・マナヅル）の生息の現況



かつては日本国内の各地にナベヅル・マナヅルの越冬地があったが、現在は鹿児島県出水地方に一極集中しており、1万羽以上のナベヅル・マナヅル等のツル類が越冬している。

出水地方への一極集中による感染症等の発生や農業被害などが懸念され、ツル類の越冬地の分散に向けた取組が進められている。

コウノトリ・ツル類が必要とする環境条件

■コウノトリ



コウノトリ

コウノトリの生態

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年の生活 (留鳥)												
生息環境	水田、池沼、湖沼、河川、湿地等を利用する。											
食物	夏期：魚類（ドジョウ、コイ、フナなど）、両生類（カエル）、昆虫類（バッタ、コウチュウ）等 冬期：魚類、両生類（カエル）、昆虫類、貝類、甲殻類（ザリガニ）等											
ねぐら	主に採食場所近くの電柱などの人工物や樹上を利用する。その他、河川の中州、山間の水を張った水田の利用も確認されている。											

コウノトリによる河川環境の利用

コウノトリは主に採食するために河川環境を利用します。水深30cm以下のワンド・たまり、浅水域などが重要です。コウノトリの食物となる魚類や両生類などの水生生物が豊富であることも重要です。

■ツル類（四国に飛来するツル類は、主にナベヅルとマナヅルの2種で、その多くがナベヅルである）

ナベヅルの生態



ナベヅル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年の生活 (冬鳥)	越冬（おおよそ家族群または群れで行動するが単独のこともある） 渡り 国外で繁殖 渡り 越冬（おおよそ家族群または群れで行動するが単独のこともある）											
生息環境	水田、湿地、河川、海岸、干潟等を利用する。											
食物	植物（種子・根茎・葉）、昆虫、魚類等											
ねぐら	水田、湿地、河川、干潟等を利用する。											

ツル類による河川環境の利用

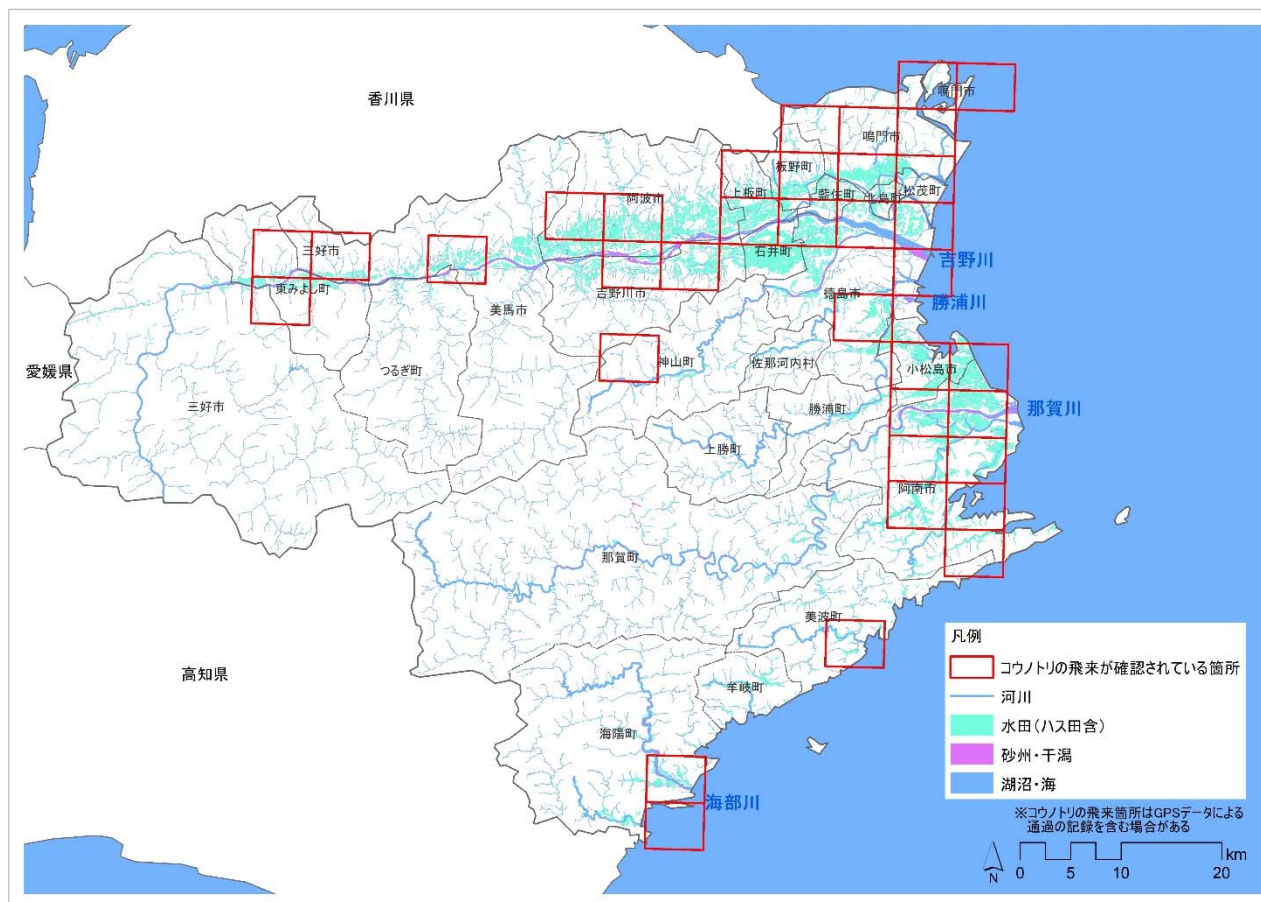
ツル類は主にねぐらとして河川環境を利用します。干潟、砂洲など開けた場所の浅水域（水深10~20cm程度）が重要です。夜間にねぐらへ人や犬が立ち入らないことや車のヘッドライトなど人工光の照射がないことも重要です。

徳島県でのコウノトリの飛来・生息状況

徳島県では、2015年頃からコウノトリの飛来が増えています。特に吉野川流域や那賀川・勝浦川流域周辺で、コウノトリの飛来が確認されています。

吉野川流域では、2015年2月に鳴門市へ飛来したコウノトリ2羽が、4月に巣づくりを始めたものの産卵には至りませんでした。2016年は産卵したものの抱卵を放棄してしまいました。2017年に、豊岡市周辺以外では初めて野外繁殖に成功し、3羽が巣立ちました。繁殖に成功した2羽は「鳴門板東ペア」とよばれています。このペアは2018年に2羽、2019年～2022年の各年に3羽のひなを巣立たせています。

那賀川・勝浦川流域周辺でもコウノトリの飛来が継続して確認されています。2018年には、「なる」（2017年に「鳴門板東ペア」から巣立ちしたオスの個体）が、6月から7月にわたり、環境保全型農業に取り組んでいる小松島市の立江町及び榑瀨町で滞在しました。



徳島県でのコウノトリの飛来・生息箇所（2000年1月～2023年1月までの情報をもとに整理）

※千葉県野田市、福井県より2022年12月までのGPSデータの提供を受けた

「国土数値情報(行政区域データ)、(河川ラインデータ)」「国土交通省」、「1/25,000植生図GISデータ」(環境省生物多様性センター)をもとに作成

徳島県でのコウノトリの飛来・生息状況（2020年1月～2020年12月）

希少種情報につき委員限り

徳島県でのコウノトリの飛来・生息状況（2021年1月～2021年12月）

希少種情報につき委員限り

徳島県でのコウノトリの飛来・生息状況（2022年1月～2022年12月）

希少種情報につき委員限り

徳島県でのコウノトリの飛来・生息状況（2023年1月）

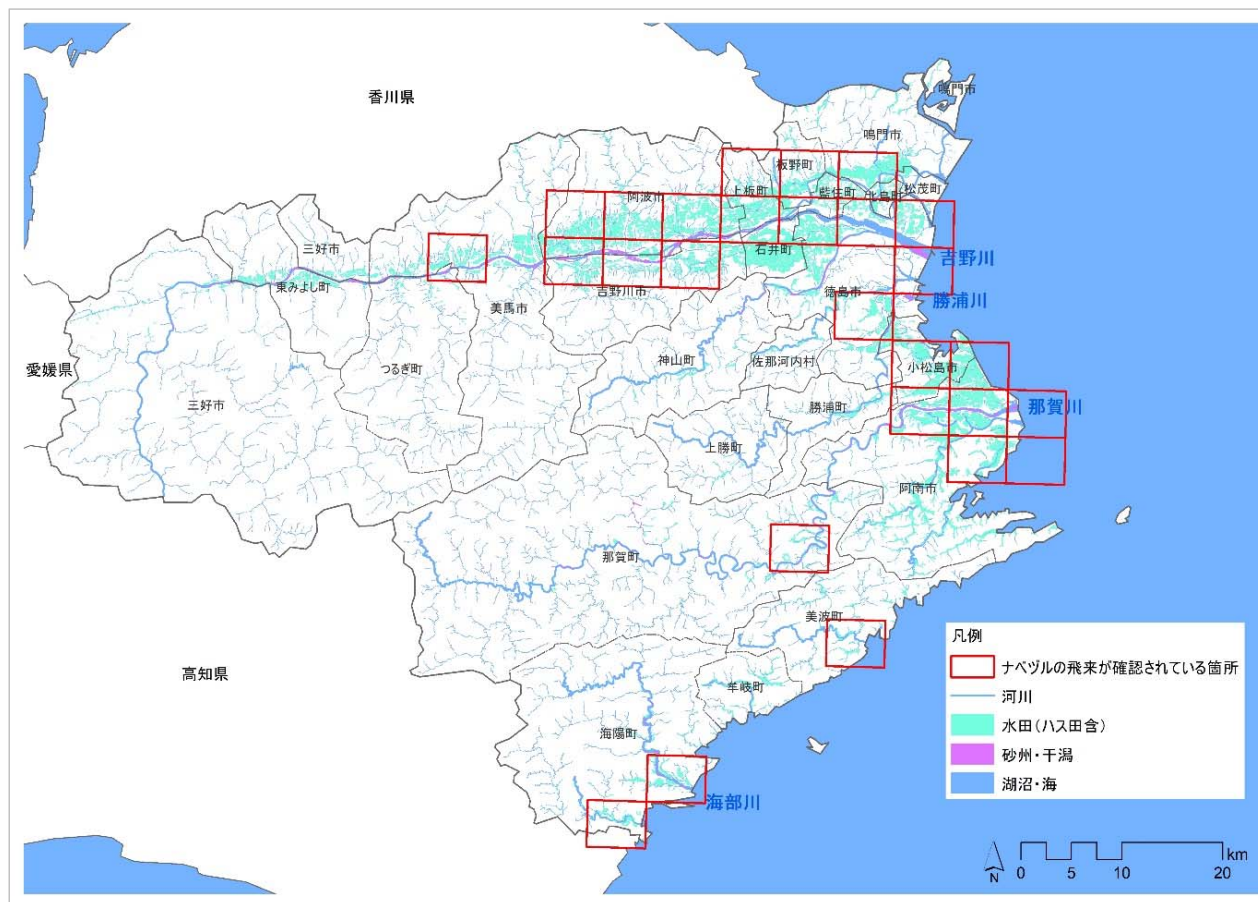
希少種情報につき委員限り

徳島県でのツル類の飛来・生息状況

徳島県へ飛来するツル類は主にナベヅルで、吉野川、那賀川、海部川の砂州や干潟の浅瀬をねぐらとして利用し、周辺の農地で落穂や二番穂等を採食します。

2015年度に、吉野川、那賀川、勝浦川、海部川の流域周辺へ多くのナベヅルが飛来し、徳島県内で66羽のナベヅルの越冬が確認されました。また、2016年度も徳島県内で32羽のナベヅルの越冬が確認されました。

2017年度～2019年度は、各年度とも徳島県内へナベヅルが飛来しましたが、越冬することはできませんでした。2020年度は、吉野川、那賀川流域にナベヅルが飛来し、徳島県内で8羽の越冬が確認されました。2021年度は、吉野川、那賀川流域へナベヅルが飛来しましたが、越冬には至りませんでした。2022年度は、吉野川流域、海部川流域へナベヅルが飛来しましたが、越冬には至りませんでした。



徳島県でのツル類の飛来・生息箇所(2000年10月～2023年1月までの情報をもとに整理)

「国土数値情報(行政区域データ)、(河川ラインデータ)」「(国土交通省)」「1/25,000植生図GISデータ」(環境省生物多様性センター)をもとに作成

徳島県でのツル類の飛来・生息状況（2020年10月～2021年3月）

希少種情報につき委員限り

徳島県でのツル類の飛来・生息状況（2021年10月～2022年3月）

希少種情報につき委員限り

徳島県でのツル類の飛来・生息状況（2022年10月～2023年1月）

希少種情報につき委員限り

(参考) 四国における今期のツル類の飛来状況

希少種情報につき委員限り

全体構想の短期目標（2025年）の達成に向けた取組の方向性

生息環境づくり

【コウノトリ】



現在

徳島県鳴門市で
2017年から1ペアが野外繁殖



2025年

徳島県内で
野外繁殖箇所、繁殖数を増やす

年間を通して食物となる生物が豊富な採食環境を確保するために、各主体と連携・協働したビオトープの整備、水域の段差解消等の取組をさらに推進していく。

【ツル類】



現在

徳島県内へ飛来はあるものの
越冬は不安定



2025年

徳島県内で
越冬箇所、越冬数を増やす

河川の砂州、干潟等のねぐら環境の保全・再生を進めるとともに、堤内地においても各主体と連携・協働してねぐら環境を創出し、複数のねぐら環境を確保していく。

採食環境となる田んぼで、稲刈り後の耕起の時期を調整するなど、落穂や二番穂を確保する取組をさらに推進していく。



地域・人づくり

コウノトリの安定的な生息・繁殖、ツル類の安定的な越冬の実現により、農業や観光業等での経済効果を上げ、地域イメージを向上させ、地域の関係人口を増やすために、各主体と連携・協働して取組を推進していく。